

## 式亭三馬の言語描写についての一考察

五所, 美子

<https://doi.org/10.15017/12224>

---

出版情報 : 語文研究. 26, pp.19-27, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 式亭三馬の言語描写についての一考察

五 所 美 子

式亭三馬は、山東京伝・十返舎一九・滝沢馬琴・為永春水らと共に、後期戯作界の代表作家の一人であり、寛政六年から文政五年に他界するまで、百三十余の作品を、黄表紙・合巻・洒落本・滑稽本・読本の多種にわたって著わした。「浮世風呂」「浮世床」「潮来婦誌」などを中心とした滑稽本・洒落本には三馬の言語に対する多大な関心と精細な注意がうかがわれる。

(イ) 〇申を「もうす」訓興立を「こうりう」音と書ける類すべて  
婦女子の読易き要とすれば音訓ともに仮名つかひを正さず  
（「浮世風呂」三編自序はしがき175ペ）

(ロ) 〇打遣など、詰る言のちやまがなどいへる片言の屬は俗語に  
扱る所也雅俗の異同は傍訓に従ひて会得あるべし  
（「浮世風呂」三編自序はしがき175ペ）

(ハ) 〇廊通の目より外国夷狭の如くなれば言語もおすさんすに  
変てせしと耳立は其鄙俚を改めず〇舟宿衆。我等の類ひ其儘に  
出して片言の誤を正さず唯有姿になして三太郎權七に與ふる

而已のみ（「辰巳婦言」凡例述意500ペ）

(ニ) 〇文法は前編の如く鄙俚片言を以てすとへば「さやうでは  
ござりませぬを」「そうじゃアござへしねへ」「御出なされませ  
を」「おいでないまし」「このべらぼうはを」「こんべらばア、右  
のごとく略語する事多し推てしるべし」  
（「船頭深話」附言 537・538ペ）

(ホ) 〇言語は大概江戸に異ならず五音の調子によりて清音を濁音  
にいふもの間多し  
（「潮来婦誌」前編卷之上凡例728ペ）

(ヘ) 〇清音を濁音に通用するは「サシスセン」「カキクケコ」「  
タチツテト」の三音也「ハヒフヘホ」は清濁ごとくく叶ひ  
すへて江戸のごとし  
（「潮来婦誌」前編卷之上凡例728ペ）

(ト) 〇常の「い」にては通例の濁音にまぎらはしければおのく  
「い」の「註」のごとき白圈を点じて「がー」と「が」の二濁を分り、  
就中「がぎぐげご」の音に清音の濁たるもの多し又「タチツ  
テト」の音に清音の濁あれども是は「だちづでど」如斯黒圈

を用う。餘は推てしるべし

(『潮来婦誌』前編卷之上凡例 728 べ)

(イ)〇此女かたことばかりならざるゆゑよく／＼ふりがなに氣をつけてよみ玉ふべし  
(『浮世風呂』二編卷之下 142 べ)

(ロ)〇常のことはなら弥壽やとよぶ所なれども此よめはいまだおやしきことばうせぬゆゑやすか弥壽かとかの声によぶなり  
(『浮世風呂』二編卷之下 149 べ)

(ハ)〇こちのもほっとしてなどいふべきを内でもといふたぐひ江戸者のなま京談笑ふにたへたり  
(『浮世風呂』三編卷之下 231 べ)

(ニ)〇トかみがたことはの江戸なまりはおつな所をひっぱりていふ也  
(『浮世風呂』四編卷之中 281 べ)

(ホ)〇三馬按ずるに。眞実本國。武蔵熊谷の産なり。所謂坂東音にて詞調子高く。しかも濁たり。  
(『大千世界案屋探』初編卷之上人物の部 817 べ)

(ヘ)〇坊も、上手に、お洗、おつかちやも、上手に、お洗、  
(『浮世風呂』三編卷之下 207 べ 三才ばかりの小児のことば)

その他、会話の前後でその人物の言語の特徴を説明した例として、  
医者のことばづかいについて 『浮世風呂』 前編卷之上 65 べ

子どものことばについて 『浮世風呂』 前編卷之下 79 べ  
少女のことばについて 『浮世風呂』 二編卷之上 114 べ

ながしの男について 『浮世風呂』 二編卷之上 115 べ 二編卷之下 142 べ・149 べ・156 べ 三編卷之上 180 べ

へ・185 べ・187 べ 三編卷之下 229 べ・230 べ・231 べ 四編卷之中 273 べ 四編卷之下 285 べ

幼児特有のう行転換現象やその他の音訛現象が描写されている例、  
三才ばかりの小児「徳松」のことば 『浮世風呂』 四編卷之

特殊な病気による言語障害をもった者のことばが描写されている例、  
「よいよい」病患者のことば 『浮世風呂』 前編卷之上 55

「はななくた」病「おかさ」のことば 『浮世風呂』 二編卷之下 166 べ・167 べ・168 べ・169 べ

読者に対して読み方を示した例、  
くどい上戸 『酩酊氣質』 上の巻 885 べ・876 べ・880 べ・889 べ

895 べ・900 べ・912 べ・916 べ・919 べ

などと、彼の言語に対する精細な注意と鋭敏さは、作品の至る所で見られる。  
さらに、「われわれは、『浮世風呂』一編から、当時の江戸市民の口のにぼされたことばの實際をかなりこまかく知ることができる。この事は、『浮世風呂』だけに限らず、三馬の他の作品(特に滑稽本といわれる類のものを中心として)についても同様である。もちろん三馬のものだけに限らず、いわゆる滑稽本の大部分のものが、江戸語の資料として有力である。しかしその中でも、三馬のものは、当時の江戸語を忠実に写したものと

として特にすぐれた言語資料となるということができる。<sup>註2</sup>と

松村明氏が論ぜられるように、三馬の言語描写は写実的態度である、一般に論ぜられている。

確かに、言語に対して人一倍周到で写実的な態度が、先に挙げた特に(イ)・(イ)からは、よくうかがえる。

ところで、三馬の上方語について調べてみると、当時の實際の上方語と異なる点がかなりある。それらは大体四つのグループに分けることができる。

(一)当時の上方に存在し、一般市民のことばとして使われたことばであるが、三馬はその場面としてふさわしくない使用をしている例

(二)演劇用語として存在した特殊なことばで、すでに口頭語としては、使用されなくなっていたことば

(三)造語

(四)江戸語

一見、これらは、三馬が「足箱根西せぬを誇る江戸人」であったため起した誤用かのように見える。が、(四)の例を除き、彼は實際の上方語を知っているながら、彼流の方法で自由にことばを駆使しているのである。

つまり、言語に対し非常な関心をもっており、彼の作品のおもしろさは言語にあるのであるが、そのおもしろさは彼独自の言語上の工夫によって、生れたのである。彼はただに言語を写實的に——当時の實際に口にもされたことばにできるだけ忠実にのみ描こうと努力したのではないようである。

次に、彼の言語描写の態度を、具体的な例を挙げつゝ、明ら

かにして行きたい。

三馬の作品中、上方弁が登場する主な所を示すと、

「かみがたもの」(男) 『浮世風呂』(日本古典文学大系) 前編卷之上 76 べ・77 べ

「かみがたすぢの女」(女) 『浮世風呂』(日本古典文学大系) 二編卷之上 130 べ・135 べ

「けち兵衛」(男) 『浮世風呂』(日本古典文学大系) 四編卷之中 269 べ・284 べ

「けち助」(男) 『浮世風呂』(日本古典文学大系) 四編卷之下 305 べ

「作兵衛」(男) 『浮世床』(日本古典全書)初編卷之中 116 べ

「大坂の人」(男)・「京の人」(男) 『客者評判記』 惣巻頭 447 べ・452 べ

「上方人」(男) 『客者評判記』(日本名著全集・江戸文芸第十四巻) 上方の芸居好 456 べ・458 べ

「かみ方者」(男) 『一盞綺言』(日本名著全集・江戸文芸第十四巻) 無益の事をあらそふ酒癖 712 べ・716 べ

上方語の資料としては、上方人の手になる洒落本・滑稽本・俄・浄瑠璃を用いた。次のものである。

(洒落本・滑稽本)

月花余情 宝暦六年 洒落本大系第一巻

陽台遺編 同 同

浪花色八卦 洒落本大系第二巻

聖遊廓 宝暦七年 洒落本大系第一巻

百花評林

洒落本大系第一卷

滑稽雌黄

滑稽文学全集第十二卷

針の供養

同

徒然醉が川

同

當世真々の川

滑稽文学全集第十二卷

虚実柳巷方言

近世文芸双書第十風俗

新話違なし

版本

養漢裸百貫

洒落本大系第八卷

うかれ草子

同

身体山吹色

同

十界和尚話

同

阿蘭陀鏡

同

昇平楽

同

言葉の玉

版本による写本

南遊記

洒落本大系第九卷

塩梅加減神包庁

版本による写本

秘事真告

近世文芸双書第十風俗

ころの外

西日本国語国文学翻刻双書刊行会 上方洒落本集

當世廓中掃除

同

足毛誠

版本

井中の水

同

遊女玉の輿

版本による写本

箱まくら

日本名著全集江戸文芸第十二卷 洒落本集

深色袂睡夢

同

大坂版廓中奇譚

版本による写本

北川鯉壳

未刊江戸文学第十二冊

(俄)

古今俄選

雑芸双書第二

今様俄選

版本

成歳俄選

同

風流俄天狗

同

(浄瑠璃)

頼光跡見論

浄瑠璃集上 日本古典文学大系

八百屋お七

同

ひらかな盛衰記

同

夏祭浪花鑑

同

仮名手本忠臣蔵

同

源平布引瀧

浄瑠璃集下 日本古典文学大系

新版歌祭文

同

鎌倉三代記

同

伽羅先代萩

浄瑠璃集下 日本古典文学大系

曾根崎心中

近松浄瑠璃集上 日本古典文学大系

堀川波鼓

同

重井筒

同

丹波與作待夜小室節

同

五十年忌歌念佛

同

冥途の飛脚

同

夕霧阿波鳴渡

同

大経師昔曆

同

心中天網島

同

女殺油地獄 享保六年 同  
 心中宵庚申 享保七年 同  
 梶久末松山 宝永五年 浄瑠璃名作集上 日本名著全集第二卷  
 傾城思弁屋 正徳五年 同  
 蘆屋道満大内鑑 享保十九年 同  
 伊賀越道中双六 天明三年 浄瑠璃名作集下 日本名著全集第七卷  
 近頃河原達引 天明五年 同  
 役行者大峰桜 寛延四年 校訂近松半二浄瑠璃集 統帝国文庫  
 奥州安達原 宝暦十二年 同  
 山城の国畜生塚 宝暦十二年 同  
 京羽二重娘気質・宝暦十四年 同  
 蘭奢待新田系図 明和一年 同  
 小夜中山鐘由来 明和三年 同  
 三日太平記 明和四年 同  
 傾城阿波の鳴門 明和五年 校訂近松半二浄瑠璃集 統帝国文庫  
 萩大名傾城敵討 明和七年 同  
 道成寺現在蛇鱗 寛保二年 校訂並木宗輔浄瑠璃集 博文館  
 那須與市西海靦 享保十九年 同  
 苜蓿委門筑紫轢 享保二十年 同  
 安倍宗任松浦笠 元文二年 同  
 釜淵雙級巴 天文二年 同  
 又、三馬の作品は、次の本によった。  
 「浮世風呂」(日本古典文学大系) 「浮世床」(日本古典全書)、「  
 一盞綺言」・「客者評判記」(日本名著全書・洒落本集)  
 右以外のものは、「帝国文庫 訂三馬傑作集」によった。

註1 ルビの○印は白圈の点をあらわす。  
 註2 松村明著「江戸語東京語の研究」894ページ897ページ

二ノ一

三馬は、上方者の順接統助詞を次の様に使用している。

諸形	位相	町人(男)	武士	土方すちの女	上方詞にかぶれた女
サカイ		21	4	7	2
サカイニ		2		2	1
ニヨツテ		13		2	1
ホドニ		1	3		
ユエ		1			
カラ		1			
アイダ		2			
ヨツテ					

順接統助詞「から」は江戸特有のことばでなく、上方でも使われていた。ただし、江戸では多く使われたが、上方では「(に)よって」や「さかい(に・で)」に押されあまり多くは用いられなかった。前表により、三馬はこの上方での用法を充分承知していたことがわかる。この様に、上方の順接統助詞として、三馬は正しく「から」を使用している。

とところが、ある場面においては、上方人の知らない江戸特有のことばであるかの様に描写している。「浮世風呂」(二編巻之上)の江戸女と上方女とのことば争いがそれである。

かみ「へ、関東べいが。……(略)……さうだから斯かうだからト。あのまア、からとはなんじやエ。山かみかた「から」だから「から」さ。故ゆゑといふことよ。そしてまた上方かみかたの「さかい」とはなんだへ。かみ「さかい」とはナ、物の境目さかいじや。ハ。物の限る所かみかたが境じやによつて。さうじやさかいに。斯かうした境と云いのじやはないかな。

上方弁の「さかい」と江戸語の「から」を対立させている。

また、三馬の順接統助詞の使用例を前表で見ると、サカイ形が最も多く、それに比べヨッテ形は少ない。実際の当時の上方では、サカイ形はごくわずかで、ヨッテ形が支配的であつた。古いサカイ形は新しいヨッテ形に勢力を奪われてしまいつゝある時期であつたが、又、上方弁の最も代表的なことばはこのサカイ形であると一般的に知られていた。

三馬は、古くからあつた、そしてみんなに知られているサカイ形を使用する事によつて、上方人らしさを出そうとしたのである。「江戸女と上方女」のことば争ひの場合では、最も上方語らしい「さかい」とそれに対立する江戸語「から」を比較対照させ、両地の違いを鮮明にさせる事により、読者の興味を引くうとしたものと思われる。言語を事実のまゝ、ただ正確に描写するだけでは、読者の興味を引く事はできない。戯作者である彼が、人物や事件をもっともらしく、おもしろく見せるため、彼独自の独創的な語法を工夫したのは当然である。

同様の例に、上方語「わし」とそれに対応する江戸語の「わたし」が見られる。文末敬語の「んす」「なます」をも、彼流の用法で、そこにせららしさを表現しようとしている。

註 奥村三雄著「近代京阪語考―順接助詞について―」

岐阜大学研究報告(人文科学)第十四号

## 二ノ二

前田勇氏の「近世上方語辞典」に、「込んでゐる」について「込む」は「のみこむ。承知する。得心する。」の意で、否定に「こまぬ」といい、肯定に「こんだ」「こんでゐる」という。

と、記されている。上方の洒落本・滑稽本には、「込む」ということばは全然使用されていず、「呑み込む」の方が使われている。その一例を示すと、

○正真らしいてしま流の謀計にもひといきのみこまねど

(『虚実柳巷方言』下・464)

○何もかものみこんでいなさる方じやなければ

(『うかれ草子』珍庵記99)

○人に自由にさす事が商売とは呑込て居るなら

(『秘事真吉』島の内の相516)

その他、「風流俄天狗 鬼やらひ」「伽羅先代萩六」「夏祭浪花鑑 八267」<sup>ペ</sup>、「ひらかな盛衰記 四182」<sup>ペ</sup>などにも見える。

つまり、当時の上方では、日常会話として「呑み込む」は使用されていたが、「込む」は用いられなかった。

浄瑠璃や俄において、「呑み込む」がやはり多く用いられているが、「込む」がわずかなが見られる。

○一四段目の後目送のハルフシからやつてくれ一こんだ衆人

(『今様俄選』二俄戻)

○其段は込んでおり升其かわりに今晚まへ帶と花四五本……

(「京羽二重娘氣質」一・247頁)

その他、「小野道風青柳硯」「伊達錦五十四郡四」に見える。

「込む」は近世後半では、主に演劇で用いられた特殊なことばであつた。三馬は江戸者のことばに、

○ハテ呑込のわるい番頭だ (「浮世風呂」前編卷之下83頁)

○コレ。もし。どうだテ。まだ呑込ねへかの。(「大千世界楽屋探」初編卷之上82頁)

○酔も甘も呑込だもんだから無理はねへ(「酪酊氣質」異見上戸900頁)

と「呑み込む」を用いているが、「込む」は用いていない。つまり、三馬の時代、江戸・上方の両地において「呑み込む」は口頭語として共通に使用されていたが、「込む」は演劇語としてのみ残っていたことばで、日常の会話では用いられていなかった。この「込む」を三馬は上方者「けち兵衛」のことばとして、

○ヲット皆までいわんすな、込でゐる(「浮世風呂」四編卷之中272頁)

と、「込である」の形で用いている。三馬はこの「込む」を瑠璃などの脚本から得たものと思われる。

当時上方では、江戸と同じ「呑み込む」が一般の会話で用いられていたので、却つて、江戸人には耳なれない、めずらしいことばを使用する事によって、上方語らしい、ひいては上方人らしい響きを持たせたものと思われる。

「込む」と同様に、日常会話ではみられない、特殊なことばである演劇語を用いた例は、外に、

ひやい (「大千世界楽屋探」初編卷之上86頁)

一盃する (「浮世床」初編卷之中117頁)

耳つぶす(「浮世風呂」二編卷之上131頁；大千世界楽屋探」初編卷之上820頁；「浮世床」柳髮新話自序68頁に「聴耳つぶす」

の形で見られる。)

順接接続詞(によつて じゃによつて それじゃによつて)

逆接接続詞(じゃて、 じゃといふて それじゃて、)

ごわます (「一盃綺言」無益のことをあらそふ酒癖713頁)

かなしがなし (「浮世床」初編卷之中117頁)

などがある。

ここにも、(一)と同様に言語の写実を事とするのではなく、却つて珍奇なことばを用いるという三馬の態度がみられる。

付言すると「ごわます」は浄瑠璃にみられる「ごわります」

「ごわんす」から、「かなしがなし」は「かなしがなしも」

から造りかえたものであらう。尚、造語については次の三で述べる。

二ノ三

江戸語の「青ものや」は、上方語の「八百屋」に相当する。

当時の上方において、「八百屋」を「八百物屋」ということは決してなかった。古いことばでもない。しかるに、三馬は「浮世風呂」において

「ドリヤ、内へ往て昼飯の支度なとせうかい。ヤ、能所へ八百屋さんが見えた。ヲイ、コリヤコリヤ、八百物屋さんくちよと待てくだんせ。」(「浮世風呂」四編卷之中272頁)

と、上方者「けち兵衛」は江戸の「青ものや」を呼びとめてい



る。しかし、又この「けち兵衛」は、江戸の「青ものうり」を呼びとめる時だけ「八百物屋」といい、前後の他の場面では正しく「八百屋」と言っている。

つまり、三馬は勝手に「八百物屋」ということばを造り、意識的にこの場の「けち兵衛」に使用させたのである。そうする事によって、三馬はこの時の「けち兵衛」のふざけた気持を表現としたのである。彼の造語の例として次の様なものがあげられる。

肝魂が天井持する（『大千世界案屋探』初編巻之上816ペ）

風負する（『浮世風呂』二編巻之上131ペ）

酒の下酒（『浮世風呂』二編巻之上132ペ）

いま〜（『浮世床』初編巻之中127ペ）

一体の（『浮世風呂』四編巻之中282ペ）

まだに（『浮世風呂』四編巻之中270ペ）

誰がない（『浮世床』初編巻之中121ペ）

お手づから（『浮世風呂』四編巻之中270ペ、「人心覗機關」667ペには江戸者の

例もある。）

お十動詞連用形十がある（『浮世風呂』四編巻之中270ペ）

一日さんがい（『浮世風呂』四編巻之中270ペ、「甲斐胸算用」巻之上635ペ）

痰火を切る（『客者評判記』惣巻頭477ペ）

ここにも、故意に耳なれない珍奇なことを求め、上方語を上方人をそれらしく作ればよいという三馬の態度がうかがえる。

## 二ノ四

江戸語の「茄子」は、上方語の「茄子」である。

○おまへに損かけちゃ、つらい場ぢやナ。何ぞ買て入合せをせうかい。此茄子はなんぼする（『浮世風呂』四編巻之中276ペ）  
○コレコレ、能う云ておかんせ、本所茄子持来るとナ。種はあれど焚て食たら山より能といふはいの（『浮世風呂』四編巻之中281ペ）

三馬は上方者にも「茄子」と江戸語を使わせている。上方者「けち兵衛」の江戸の商人に対することばであるから、江戸語で「茄子」と言ったとも考えられる。が、次の様な例もある。  
○向の唄や隣の兒なぞ対手にして、あはう口たっけば、夫が愛に為て、能氣付てくれるはい。ヤ、茄子田菜が出来たの。或はまた蛤焚たのといふて、平皿に一ぱいッ、もありつくはい。  
（『浮世風呂』四編巻之中271ペ）

これも「けち兵衛」のことばである。話の内容から、「ヤ、茄子田菜が出来た」「蛤焚いた」ということは、隣の人（江戸者）のことばともとれるが、「茄子田菜」に「江戸にいふしぎやきの事」という註までわざわざつけている所から、三馬は上方詞として使ったことがはっきりわかる。つまり、隣の人のことばを間接話法でいっているのである。

「茄子鳴焼。京坂にては、なすびのでんがくと云、京坂にては、茄子の皮を去り、二つ三つ切り…」守貞漫稿食類

「茄子の田菜。しぎ焼といふては通ぜず。」文政四年カ浪花方言「鳴焼——茄子田菜」（上は江戸、下は上方）三都の午睡（天保年間）

又、上方の資料いづれを見ても、「なす」「なす田菜」はなく、「なすび」「なすびの田菜」が使われている。三馬は、江

戸詞「なす」をうっかり上方語として用いてしまい、そして「なす田楽」という感違ひまで起こしたのであろう。同様の例に次の様なものがある。

したち（浮世風呂 二編卷之上132ペ）——上方では「しよ油」という。  
天辺（浮世床 四編卷之中120ペ）——上方では「天井」という。

ぞんき（浮世風呂 四編卷之中71ペ）

取始未する（浮世風呂 四編卷之中200ペ）

ここには、従来云われているのと反対の言語に対して不注意などというより、むしろいかげんな三馬の態度がうかがわれる。

### 三

以上の様に、三馬は言語の写実を事としたことは事実ながら一面では、言語を自由に我流の用法で使う事によって、人物や事件を写実らしく、もっともらしく、鮮明に、効果的に描こうとしたのである。言語に対して大きな関心をもっていた三馬は生来の言語に対する鋭敏さで、彼独自の語法をもつてし、語彙まで作つたのである。そこに、戯作者としての彼の手腕は大いに発揮されているのである。

この様な戯作者的言語描写の態度は、上方語だけでなく、江戸語やその他の方言にも、そして言語の駆使を中心とした作品の創作態度全体に通じているのではないかと思われるが、今後の課題として、残すことにする。